

大学生における所属大学へのコミュニティ感覚

—測定尺度の開発と関連要因の検討—

井上麻衣¹⁾・久田満²⁾

Psychological sense of community in Japanese college students.
—Development of a new scale and examination of related factors—

Mai Inoue and Mitsuru Hisata

The purpose of this study was to develop a new scale of the psychological sense of community (SOC) for Japanese college students. First, questionnaires were administered to a sample of 462 students from three different universities in Tokyo to develop a new SOC scale. The results of factor analysis showed that the new scale consisted of four factors, which we named “unitedness”, “attachment and contribution”, “comfortability”, and “belongingness”. The results also showed acceptable reliability and validity for a psychological scale. Using the same sample of the study, we utilized a multiple regression analysis to identify related factors of SOC. Results indicated that among the factors we obtained, social support from the faculty member (s) and their preference of university before entering were related strongly with a higher SOC score. It is hoped that more data on students’ SOC can create effective intervention programs and/or support systems for students who have problems during their college life.

Key-words : Psychological sense of community, Mental health, College student

問題と目的

「大学全入時代」と言われる現在の日本では、大学生の多様化が一つの大きな問題点として注目されている。学力や適性に問題があったり、発達障害等で集団行動に馴染めなかったりする学生が増加しているのである。とりわけ新入生は新たな生活環境としての大学への適応に困難を感じやすく、中途退学の問題にもつながりやすいことが指摘されている（山田，2006など）。事実、日本における大学生の中途退学者数が年間約5万人にのぼっており（文部科学省，2009），日本の大学生を取り巻く状況は年々厳しさを増している。中途退学の場合、目標が他に見つかる進路変更などの積極的な理由によるものもあるだろうが、太田・桜井（2003）が指摘するように、表向きの理由として「経済的理由」などを挙げつつも、対人関係や学生生活に馴染めないことで生じる孤立感や不適応感、つまりメンタルヘルスに関連すると考えられる退学も実際にはかなりの割合で内在していると思われる。学生側の申し出通りに事務手続きを行い、結果として学業継続の可能性のあるケースを大学から放り

出してしまうことのないよう、学生の背景にある心理学的な問題を把握し、適切に対応することが求められるだろう。そうした点から、学生のメンタルヘルスの問題について縦断的に検討していくことの重要性が唱えられている（大久保・青柳，2004など）。

大学生の中途退学の問題は、大学側や社会全体にとっても大きな問題である。学校側にとっては、卒業までに中途退学者が払う予定だった学納金が支払われないことになる。生き残りをかけて様々な改革に取り組んでいる多くの大学にとって、こうした事態は経営上での大きなダメージとなることが容易に想像される。一方、社会に及ぼす影響としては、中途退学者の正規雇用に就く割合が低下することである。独立行政法人労働政策研究・研修機構（2006）の調査によると、中退者の約7%が無職になることが明らかとなっているが、こうした実態を踏まえて日本中退予防研究所（2010）は、本来納税する側の人間がそのまま社会保障の受給者となる可能性を危惧している。社会保障という観点から考えると、本来支える側であるはずの若者たちが無職のまましていると、労働・納税を経ずに支えられる側となり、労働者の負担がさらに増えることになるのである。

ところで、日本におけるこれまでの大学生のメンタルヘルスや中途退学に関する研究を概観すると、「適応」

1) 久喜すずのき病院

2) 上智大学総合人間科学部心理学科

という概念を用いて学生を大学側に合わせようという視点に立ったものが多い。それに対してコミュニティ心理学では、人は家族、所属集団、組織、政治体系などといった様々なコミュニティという文脈の中でそれらと相互に作用しながら存在している文脈内存在 (person-in-context) であるという視点を持つ (Orford, 1992)。この考えの中では、「人と環境の適合 (person-environmental fit)」が高い状態が理想とされ、大学と学生との間の適合 (fitness) の向上を目指すことが目標となる。

欧米では、こうした「人と環境の適合」という概念を基盤として、所属するコミュニティに対する態度を意味するコミュニティ感覚 (Sarason, 1974) の成員に及ぼす影響が注目されている。コミュニティ感覚研究の先駆者である McMillan & Chavis (1986) は、Sense of Community Index: SCI と呼ばれる独自の尺度を開発し、コミュニティ感覚は、1) メンバーシップ、2) 所属感、3) 統合とニーズの充足、そして 4) 情緒的結合の 4 因子から成ることを示した。つまり、コミュニティ感覚は集団への単純な所属意識ではなく、当該コミュニティの成員が互いの相互作用をどのように認知しているか、成員間の情緒的なつながりはどの程度かといった側面により重きをおいた概念であるといえる (池田, 2006)。

McMillan & Chavis (1986) 以降、欧米では地域社会や会社組織というような領域別のコミュニティ感覚尺度が開発され、成員のメンタルヘルスの維持・向上に寄与することが示唆されている。たとえば人生への満足感 (Prezza, Amici, Roberti & Tedeschi, 2001; Prezza & Costantini, 1998)、孤独感の低さ (Pretty, Andrew and Collett, 1994; Prezza, Amici, Roberti, & Tedeschi, 2001)、ウェルビーイング (Chiessi, Cicognani & Sonn, 2010) などがコミュニティ感覚と正の相関を示すことが確認されている。

また、大学生や高校生を対象としたコミュニティ感覚尺度の作成やその関連要因についても数多くの研究が行われている。たとえば、高校生を対象とした Royal & Rossi (1996) の研究では、自分の学校に対するコミュニティ感覚の高い学生は、授業をさぼったり中退を考えたことが少なく、授業の準備ができていないと不快に感じ、教師が生徒のためによく働いてくれると感じる傾向が強いという結果が示されている。Lounsbury, Loveland & Gibson (2003) では、「BIG FIVE」の 5 因子すべてとコミュニティ感覚に関連があることが見出され、高校生ではこうしたパーソナリティ要因を含めて検討した上でもコミュニティ感覚の高さが生徒の欠席を抑制することが示唆されている。大学 1 年生を対象として行った Jacobs & Archie (2008) では、彼らの大学に

残留する意思とコミュニティ感覚に有意な正の関連性があることが見出されており、強いコミュニティ感覚は大学生の中退予防にも一定の効果があることが推測される。

日本においても、ウェルビーイングの高さ (池田, 2006; 笹尾・小山・池田, 2003) やストレスの低さ (山口・服部・中村・山本・小林, 2002) といったメンタルヘルスの指標との関係性が示唆されているが、コミュニティ感覚の研究自体がまだ始まったばかりであり、尺度開発の段階に留まっているように思われる。たとえば、井上・久田 (2012) では、大学生用のコミュニティ感覚尺度を作成しメンタルヘルスとの相関についての検討を行っているが、その研究では東京都内の 1 つの大学の学生を対象としており、サンプルも少なく、結果に偏りがあることは否定できない。さらに、これまで述べてきたように、コミュニティ感覚を高めることが精神的な健康に望ましい影響を及ぼすことに関しては様々な知見が蓄積されている一方で、コミュニティ感覚を高めるための具体的方策が見出されていないことが問題点として指摘されている (植村, 2012)。最近になって日本でも、コミュニティ感覚を高めるための方策として加々美・村岡・塩谷・山上 (2014) は、大学 1 年生を対象とした宿泊研修の効果をも所属大学へのコミュニティ感覚を指標として検討することの可能性について言及しており、荒井・久田 (2013) は、上司のリーダーシップスタイルがコミュニティ感覚に影響を与える可能性を指摘している。しかしながら、コミュニティ感覚を高める方策を立案するための基礎的データは、まだ十分とはいえないのが日本の現状であろう。

そこで本研究では、対象者をそれぞれ特色の異なる複数の大学に所属する大学生に拡大し、新たに大学生用コミュニティ感覚尺度を作成することを目的とする。その際、既に多くの研究で示されているメンタルヘルスとの相関を検討することで妥当性を検証する。そして、作成された尺度を用いて、大学生におけるコミュニティ感覚の関連要因について検討する。

方 法

1. 対象と手続き

2013年6月から7月にかけて、東京都内にある特色の異なる3つの私立総合大学の学生を対象に質問紙調査を実施した。1つは仏教系大学、1つはキリスト教系大学、もう1つは非宗教系大学であった。それぞれの大学で、授業時間を利用して質問紙を配布しその場で回収した。対象者への倫理的配慮としては、質問紙の表紙に、この調査の目的、匿名で実施すること、成績とは無関係であること、回答は任意であることを明記し、回答

をもって調査協力への承諾と見なした。その結果、462名（性別：男子176名，女子286名，学年：1年生26名，2年生244名，3年生167名，4年生19名）から有効な回答を得た。

2. 調査内容

1) コミュニティ感覚尺度：Lounsbury & DeNeui (1996), Chipuer & Pretty (1999), Albanesi, Elvira, & Zani. (2004), さらには井上・久田 (2012) の尺度項目を参考に独自に項目を作成して，筆者らを含む3名の臨床心理士で内容的妥当性を検討し，合計33個の暫定項目を設定した。それぞれの項目に対して「4. 強くそう思う」から「1. 全くそう思わない」までの4件法で尋ねた。

2) メンタルヘルス：主観的ウェルビーイングを測定する，改訂-いきいき度尺度の「満足感」，「ネガティブ気分」，「チャレンジ精神」，「気分転換」の4つの下位尺度を用いた。それぞれの項目に対して，「4. かなりそう思う」から「1. そうは思わない」までの4件法で尋ねた。この改訂-いきいき度尺度は，20歳代～60歳代の一般人6,473名を対象として作成された簡便な尺度で，十分な信頼性と妥当性を有している（田中・神宮・津田，2006a, 2006b）。

3) 関連要因：関連要因としては，1) 入学時の志望度，2) 授業の面白さ，3) 課外活動へのコミットメント，そして4) 教員からのソーシャルサポートを取り上げた。入学時点での所属大学への志望度については，「5. 絶対に入りたかった」から「1. 入りたくなかった」までの5段階で尋ねた。授業の面白さについては，所属大学の授業全般についてどの程度面白いと思っているかを「5. どの授業も面白い」から「1. どの授業もつまらない」までの5段階で尋ねた。課外活動へのコミットメントについては，所属大学内で行っている部活動やサークル活動について，「6. とても熱心に活動している」から「1. 参加していない」までの6段階で尋ねた。教員からのサポートについては，久田・千田・箕口 (1989) の学生用ソーシャルサポート尺度の下位尺度である「先生サポート」を使用した。

結果と考察

暫定33項目の天井効果と床効果を確認したところ，1項目に床効果があり除外した。一方，部分-全体相関については，0.2以下のものは認められなかった。そこで残りの32項目に対して因子分析（最尤法プロマックス回転）を行った。その結果，4因子解が妥当であると判断された。再度因子分析を行い，因子負荷量.40を基準

に二重負荷項目を削除した結果，4因子24項目が選出された（Table. 1）。

第1因子は「私の大学の学生は，助け合いの精神であふれている」や「学生たちの間には，強い一体感が感じられる」といった9項目から成り，「一体感」とした ($\alpha = .882$)。第2因子は「私の大学が危機状態に陥ったら，できるかぎりの手助けをしたい」や「この大学に強い愛着を感じる」といった所属大学への貢献意欲や愛着を示す7項目で構成されており，「愛着と貢献」とした ($\alpha = .891$)。第3因子は「この大学は居心地がよい」や「私はこの大学にいて落ち着く」といった大学での居心地の良さに関する5項目で構成されていたため，「居心地の良さ」とした ($\alpha = .855$)。第4因子は，「私はこの大学に所属しているという感覚が強い」や「私は，この大学の一員なのだ」と強く感じる」という大学に対する学生たちの所属感に関する3項目で構成されていたため，「所属感」とした ($\alpha = .796$)。以上の結果から，4因子24項目からなる大学生用コミュニティ感覚尺度が作成された。

所属大学へのコミュニティ感覚尺度の4つの下位尺度ごとに平均値，標準偏差を算出した。それらに加えて，項目数で割った平均値，歪度，尖度，最小値，最大値も求めた。結果を Table. 2 に示す。全ての下位尺度の α 係数は十分に高く，基本統計量のデータからも分布に大きな偏りもないことから，本研究において作成されたコミュニティ感覚尺度は心理尺度としての信頼性を有しているといえよう。

このコミュニティ感覚尺度の妥当性に関しては，メンタルヘルスとの関連性を検討した。先述したように，欧米では，多くの研究によってコミュニティ感覚はメンタルヘルスと関連していることが指摘されている。枠組みとしてのコミュニティをどこに設定し，その影響を受ける個人を誰にするかという点でのバリエーションから，研究によって因子構造が異なっているもの（高橋・森田・石津，2010），コミュニティ感覚は，ポジティブな感情を増幅し，ネガティブな感情を抑制する効果を有しているといえる。そこで本研究においても，メンタルヘルスを表す指標を用いて今回作成したコミュニティ感覚尺度の妥当性の検証を試みた。

改訂-いきいき度尺度とコミュニティ感覚尺度の相関をみたところ（Table. 3），「一体感」は満足感 ($r = .309, p < .001$)，チャレンジ精神 ($r = .120, p < .01$)，気分転換 ($r = .122, p < .05$) との間有意な正の相関が見られた。また，「愛着と貢献」では満足感 ($r = .372, p < .001$)，チャレンジ精神 ($r = .211, p < .001$)，気分転換 ($r = .139, p < .01$) と正の相関が見られた。さらに，

Table. 1 コミュニティ感覚尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の最終的な因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV	
一体感 ($\alpha=.882$)					
33 学生たちは、この大学が主催する様々な行事に強い関心をもっている	.72	-.09	-.03	.10	
19 私の大学の学生は、助け合いの精神であふれている	.70	.17	.10	-.18	
40 この大学では、学生が楽しめるイベントが多い	.69	-.11	.00	.18	
29 この大学の学生たちの中には、強い一体感が感じられる	.65	.16	.04	-.03	
36 この大学にはコミュニティ (共同体) としての要素が強くなる	.55	-.17	.11	.33	
18 大学で何か事件や事故が起きたら、みんなで助け合うだろう	.53	.35	.04	-.23	
38 私がこの大学から期待するものと、他の学生が期待するものは似ている	.50	.10	-.17	.26	
34 この大学には、もし私が何かで困ったとしたら、助けてくれる人や機関が多い	.49	-.11	.02	.34	
2 この大学の学生は、同じ価値観を共有している	.42	.09	.01	-.04	
愛着と貢献 ($\alpha=.891$)					
15 他人が私の大学の悪口を言うとう腹が立つ	-.13	.77	-.13	.12	
31 私の大学が危機状態に陥ったら、できるかぎりの手助けをしたい	.30	.60	-.15	.02	
30 将来社会人となっても、何らかの形で自分の大学に貢献したい	.31	.58	-.04	-.03	
27 私は、高校の後輩に自分の大学への進学を勧めたい	.08	.56	.22	.02	
17 この大学に強い愛着を感じる	.06	.55	.19	.10	
14 街で同じ大学の学生を見かけるとうれしくなる	.06	.49	.11	.06	
7 私は、この大学の学生であることを誇りに感じている	.07	.47	.19	.13	
居心地の良さ ($\alpha=.855$)					
12 この大学は居心地がよい	.05	-.10	.91	.04	
5 私はこの大学にいと落ち着く	.01	-.05	.91	-.01	
9 大学に行くのがとても楽しい	-.15	.30	.52	.09	
4 大学のキャンパスには社交的な雰囲気が漂っている	.36	-.12	.48	-.09	
20 この大学は自分に向いていると思う	-.10	.26	.44	.21	
所属感 ($\alpha=.796$)					
22 私はこの大学に所属しているという感覚が強い	-.06	.22	.03	.68	
35 私は、「この大学の一員なのだ」と強く感じる	.20	.27	.02	.49	
23 大学の中にいと安全だと感じる	.03	.09	.11	.48	
	因子間相関	I	II	III	IV
	I		.69	.61	.58
	II			.69	.62
	III				.63
	IV				

〔居心地の良さ〕では、満足感 ($r=.427, p<.001$)、チャレンジ精神 ($r=.246, p<.001$)、気分転換 ($r=.199, p<.001$) との間に正の相関が見られた。最後に、〔所属感〕では、満足感 ($r=.373, p<.001$)、チャレンジ精神 ($r=.176, p<.001$)、気分転換 ($r=.147, p<.01$) との間に正の相関が見られた。全体として、コミュニティ感覚とネガティブ気分との間には有意な相関がみられなかったものの、各下位尺度とその他のメンタルヘルス指標の間には概ね予想されたような有意な相関が見られた。とりわけ〔居心地の良さ〕と満足感との相関係数が高かった。これらの結果は、従来より指摘されているコミュ

ニティ感覚の強さがポジティブな精神状態と関連があるという結果と一致しており、今回新たに作成された大学生用コミュニティ感覚尺度にはある程度の妥当性が備わっていることが示された。

次に、コミュニティ感覚に関連する要因について検討するために、〔一体感〕、〔愛着と貢献〕、〔居心地の良さ〕、〔所属感〕を目的変数とし、性別、学年、所属大学への志望度、授業の面白さ、課外活動へのコミットメント、先生サポートの5つの変数を説明変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。その際、性別について男性を1、女性を2とコード化した。結果を Table. 4

Table. 2 所属大学へのコミュニティ感覚尺度の基本統計量 (N=462)

項目	下位尺度			所属感
	一体感	愛着と貢献	居心地の良さ	
平均値 (合計)	20.07	16.38	13.39	7.42
標準偏差	4.78	4.60	3.04	1.87
平均値 (項目数別)	2.23	2.34	2.68	2.47
歪度 (SE)	-.202 (.114)	-.122 (.114)	-.512 (.114)	-.148 (.114)
尖度 (SE)	.061 (.227)	-.384 (.227)	.192 (.227)	.391 (.227)
最小値	9.00	7.00	5.00	3.00
最大値	36.00	28.00	20.00	12.00

Table. 3 コミュニティ感覚尺度得点といきいき度の相関

いきいき度	一体感	愛着と貢献	居心地の良さ	所属感
満足感	.309***	.372***	.427***	.373***
ネガティブ気分	.013	-.033	.091	-.012
チャレンジ精神	.120**	.211***	.246***	.176***
気分転換	.122*	.139**	.199***	.147**

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

Table. 4 コミュニティ感覚に寄与する要因 (N=444)

説明変数	一体感	愛着と貢献	居心地の良さ	所属感
	β	β	β	β
性別	-.026	.018	.042	.029
学年	-.068	-.057	-.012	-.013
志望度	.225***	.336***	.283***	.317***
授業	.175***	.132**	.246***	.171***
課外活動	.113**	.146***	.227***	.151***
先生サポート	.342***	.298***	.189***	.231***
R^2	.293***	.328***	.328***	.291***

n = 男性166名, 女性278名 ** $p < .01$. *** $p < .001$.

に示す。

すべての下位尺度が、志望度、授業の面白さ、課外活動、先生サポートとの間に有意な標準偏回帰係数を示した。特に、志望度と先生サポートについては比較的高い数値が示され、これらがコミュニティ感覚を高める要因としてある程度影響力を有していることが推察される。一方で、性別や学年についてはコミュニティ感覚の

下位尺度との間に有意な関連は見られなかった。

性別や学年については、1つの大学の学生を対象とした井上 (2010) や久田・井上 (2012) では、女子学生の方が男子学生よりも高いコミュニティ感覚を有していることや、学年によってコミュニティ感覚に差が生じる可能性が指摘されている。個々の大学の特色によって、その大学の学生のコミュニティ感覚に影響を及ぼす要因が異なり、今回は複数の大学が対象であったために相殺されたのかもしれない。

入学時の志望度は、[一体感] ($\beta = .225, p < .001$), [愛着と貢献] ($\beta = .336, p < .001$), [居心地の良さ] ($\beta = .283, p < .001$), [所属感] ($\beta = .317, p < .001$) と有意な正の相関を示した。このことから、入学時の志望度が高い学生ほど、入学後のコミュニティ感覚も高くなることが示唆された。この結果は、希望する大学に入学したかどうかでコミュニティ感覚に差が生じる可能性を示している。しかし一方で、入学時の志望度が入学後のコミュニティ感覚に与える影響は、特に大きいとはいえなかった。すなわち、入学時には志望度の低い本意入学者に対しても、何らかの介入を行うことでコミュニティ感覚を高めることが可能であることを示唆している。浜島 (2003) は大学入学後の意識変化を調査し、第一志望ではない学生でも肯定的な変化をすることが多いとしており、これを支持する研究も多い (伊藤, 1995; 庄司, 2011など)。コミュニティ感覚の変化をもたらす他の要因について明確になれば、たとえ本意入学者でも自分の大学に対するコミュニティ感覚を高めることができるといえるだろう。

授業の面白さは、[一体感] ($\beta = .175, p < .001$), [愛着と貢献] ($\beta = .132, p < .01$), [居心地の良さ] ($\beta = .246, p < .001$), [所属感] ($\beta = .171, p < .001$) と、弱いながらも有意な正の相関を示した。すなわち、大学の授業を面白いと感じている学生ほどコミュニティ感覚が高いといえる。武内 (2003) は、最近の学生が強い勉学志向を有していることを指摘している。不況下での就職難に備え、少しでも自分の付加価値を高めようと日頃から努力する学生が多く、授業が面白いこと、あるいは満足できるものであることは、学生のニーズとして高いものであることが推察される。井上 (2011) では、授業に対する満足感が得られていない新入生が、半年の期間を経てコミュニティ感覚が低下していた例が示されており、武内 (2003) の見解と合わせると、学生のニーズに合った授業がコミュニティ感覚の維持・向上に寄与する可能性が指摘できよう。

課外活動については、[一体感] ($\beta = .113, p < .01$), [愛着と貢献] ($\beta = .146, p < .01$), [居心地の良さ]

($\beta = .227, p < .001$), [所属感] ($\beta = .151, p < .001$) との間に有意な正の相関が見出された。学内の課外活動に熱心に参加している学生ほど、高いコミュニティ感覚を有しているといえる。Lounsbury & DeNeui (1996) も、大学の社交クラブに入っている人の方がそうでない人よりもコミュニティ感覚が高いという結果を報告している。また、Elkins, Forrester, & N. Elkins (2011) でも、学内における課外活動への強い関与は、高いコミュニティ感覚をもたらすことが示唆されており、彼らは、学内で行われるスポーツイベントが学生同士のポジティブな相互作用を促進し、コミュニティ感覚につながると解釈している。

教員からのサポートについては、[一体感] ($\beta = .342, p < .001$), [愛着と貢献] ($\beta = .298, p < .001$), [居心地の良さ] ($\beta = .189, p < .001$), [所属感] ($\beta = .231, p < .001$) との間に有意な正の相関が示された。教員から支援を得られていると感じている学生ほど、コミュニティ感覚が高いということである。Evans (2007) は、リーダーシッププログラムに参加した学生がそのプログラムのどのような側面からコミュニティ感覚を得られたと捉えているのかを調査し、学生の発言に対して年配者からの共鳴などが得られることがコミュニティ感覚の向上に寄与していると考察している。こうしたことから、大学コミュニティ内における年配者、すなわち教授等からの励ましやサポートが、若年層である学生のコミュニティ感覚を高めることにつながる可能性が指摘できる。今後は、教員からのどのようなサポートが学生のコミュニティ感覚を高めることにより有効なのかについて、詳細な検討が望まれる。

以上まとめると、本研究では、大学生の所属大学へのコミュニティ感覚の高低には入学時の志望度や教員からのサポートが比較的大きく関与していることが示唆された。また、授業に対する満足度や課外活動へのコミットメントの度合いも影響しているといえる。したがって、大学側としては、学生の中退予防やメンタルヘルスの維持・向上に関して、これらの要因を充実させていくことが一つの指針となるであろう。

とはいえ、本研究は横断的なデザインであり、以上のような要因がコミュニティ感覚を規定するものであるとは言い切れない。たとえば、元々コミュニティ感覚が高い学生が授業を肯定的に評価するという可能性も否定できない。コミュニティ感覚を規定する要因を特定するためには、縦断的な研究が不可欠である。すなわち、入学時点でのコミュニティ感覚が学年を経るにつれてどのように変化するか追跡し、その変化にはどのような要因が影響しているのかを解明する必要がある。そのような

研究が積み重ねられることによって、どの時点でどのような介入プログラムが有効なのかを具体化できるであろう。

冒頭にも述べたように、多様な背景をもった大学生が増加している現在、大学側も入学を許可した以上は彼らの多様なニーズに応える努力が必要であり、その具体策の立案に向けて日本でも大学生におけるコミュニティ感覚に関する研究が蓄積されることを期待したい。

参考・引用文献

- Albanesi, C., Elvira, C., & Zani, B. (2007). Sense of community, civic engagement and social well-being in Italian adolescents. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, *17*, 387-406.
- 荒井久美・久田 満 (2014). 若年就労者における職場得へのコミュニティ感覚と精神健康および上司のリーダーシップとの関連 上智大学心理学年報, *38*, 45-52.
- 朝日新聞 (2009). 大学進学率, 5割超す 就職率は6年ぶり減 09年春, 文科省調べ 8月7日朝刊
- Chavis, D. M. & Wandersman, A. (1990). Sense of community in the urban-environment—a catalyst for participation and community-development. *American Journal of community psychology*, *18*(1), 55-77.
- Chiessi, M, Chicognani, E. & Sonn, C. (2010). Assessing sense of community on adolescents: Validating the brief scale of sense of community in adolescents (SOC-A), *Journal of community psychology*, *38*(3), 276-292.
- Chipuer, H. & Pretty, G. (1999). A review of the sense of community index: current uses, factor structure, reliability, and further development *Journal of Community Psychology*, *27*, 643-658.
- 独立行政労働法人労働政策研究・研修機構 (2006). 大都市の若者の就業行動と移行過程—包括的な移行支援に向けて— http://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/documents/072_01.pdf (2011年12月28日)
- Elkins, D. J., Forrester, S. A., & Noël-Elkins, A. V. (2011). Students' perceived sense of campus community: The influence of out-of-class experience. *College Student Journal*, *45*, 105-121.
- Evans, S. D. (2007). Youth sense of community: Voice and power in community contexts. *Journal of Community Psychology*, *35*, 693-709.
- 浜島幸司 (2003). 大学生生活満足度 武内 清 (編) キャンパスライフの今 上智大学出版 pp. 73-90.

- 久田 満 (1987). ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, **20**(2), 2-11.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1)(2) 日本社会心理学会第30回大会論文集, 143-146.
- 久田 満・井上麻衣 (2012). 大学生における所属大学へのコミュニティ感覚とメンタルヘルス(2)—メンタルヘルスとの関係一, 日本コミュニティ心理学会第15回大会発表論文集, 46-47.
- 池田 満 (2006). 大学生の心理的コミュニティ感覚: 日本と韓国の異文化間比較 (教育心理学), 国際基督教大学学報 I-A, 教育研究, **48**, 151-160.
- 井上麻衣 (2010). 上智大生のコミュニティ感覚とその関連要因 上智大学総合人間科学部心理学専攻卒業論文 (未公開).
- 井上麻衣 (2012). 大学新入生におけるコミュニティ感覚に関する研究—大学生用コミュニティ感覚尺度の作成とメンタルヘルスとの関係を中心に— 上智大学大学院総合人間科学研究科心理学専攻臨床心理学コース博士前期課程論文 (未公開).
- 井上麻衣・久田 満 (2012). 大学生における所属大学へのコミュニティ感覚とメンタルヘルス(1)—学生用コミュニティ感覚尺度の作成— 日本コミュニティ心理学会第15回大会発表論文集, 40-41.
- 伊藤美奈子 (1995). 不本意就学類型化の試みとその特徴についての検討 青年心理学研究, **7**, 30-41.
- 加々美智光・村岡智子・塩谷 亨・山上史野 (2014). 初年次宿泊研修の効果を所属大学へのコミュニティ感覚を用いて測定する試み KIT progress : 工学教育研究, **21**, 177-189.
- Jacobs, J. & Archie, T. (2008). Investigating Sense of Community in First-Year College Students. *Journal of Experiential Education*, **30**, 282-285.
- Lounsbury, J. W., & DeNeui, D. (1996). Collegiate psychological sense of community in relation to size of college / university and extroversion. *Journal of Community Psychology*, **24**, 381-394.
- Lounsbury, J. W., Loveland, J. M., & Gibson, L. W. (2003). An investigation of psychological sense of community in relation to big five personality traits. *Journal of Community Psychology*, **31**, 531-541.
- McMillan, D. W. & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: A definition and theory. *Journal of Community Psychology*, **14**, 6-23.
- 文部科学省 (2009). 各大学等の授業料滞納や中退等の状況 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chou-sa/shougai/021/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1267794_3_1.pdf#search= (2014年 9月15日)
- 文部科学省 (2013). 平成25年度学校基本調査 (確定値) について http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/01/29/1342607_1_1.pdf (2014年 9月15日)
- 諸星 裕 (2008). 消える大学残る大学 全入時代の生き残り戦略 集英社
- 日本中退予防研究所 (2010). 中退白書2010 高等教育機関からの中退 NPO 法人 NEWVERY
- 大久保智生・青柳 肇 (2004). 大学1年生における大学環境への適応感の変化の検討 大学生用適応感尺度の作成の試み(2) ソーシャル・モチベーション研究, **3**, 39-45.
- 大久保智生・青柳 肇 (2005). 大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するか— 人間科学研究, **13**, 156-169.
- 太田裕一・桜井育子 (2003). コミュニティと危機介入—ふたつのキャンパスの学生相談における比較— 学生相談研究, **24**, 119-228.
- Orford, J. (1992). *Community psychology: theory and practice* Willy Publishers.
- Pretty, G. M. H., Andrews, L. & Collet, C. (1994). Exploring adolescents' sense of community and its relationship to loneliness, *Journal of Community Psychology*, **22**(4), 346-358.
- Prezza, M., Amici, M., Roberti, T. & Tedeschi, G. (2001). Sense of community referred to the whole town : Its relations with neighboring, loneliness, life satisfaction, and area of residence, *Journal of Community Psychology*, **29**(1), 29-52.
- Prezza, M. & Costantini, S. (1998). Sense of community and its life satisfaction: Investigation in three different territorial contexts. *Journal of Community and applied social psychology*, **8**(3), 181-194.
- Royal, M. A. & Rossi, R. J. (1996). Individual-Level Correlates of Sense of Community: Findings from Workplace and School. *Journal of Community Psychology*, **24**(4), 395-416.
- Sarason, S. B. (1974). *The Psychological sense of community. Prospects for a community psychology*. San Francisco: jossey-Boss.
- 笹尾敏明・小山 梓・池田 満 (2003). 次世代型ファカルティ・ディベロップメント (FD) プログラムに向けて: コミュニティ心理学的視座からの検討 (教育心理). 国際基督教大学学報 I-A, 教育研究, **45**,

- 55-71.
- 庄司正実 (2011). 心理学系大学新入生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因 目白大学心理学研究, **7**, 15-27.
- 武内 清 (2003). 授業と学生 武内 清 (編) キャンパスライフの今 玉川大学出版部 pp. 16-29.
- 武内 清 (2005). 大学とキャンパスライフ 武内清 (編) 大学とキャンパスライフ 上智大学出版 pp. 7-35.
- 高橋美保・森田慎一郎・石津和子 (2010). 集団主義とコミュニティ感覚がメンタルヘルスに及ぼす影響—日・中・韓の国際比較を通して— 東京大学大学院教育研究紀要, **50**, 159-179.
- 田中芳幸・津田 彰・神宮純江 (2006a). 改訂—いきいき度尺度 (Psychological Lively Scale-Revised) (PLS-R) の開発 健康支援, **8**(2), 117-129.
- 田中芳幸・津田 彰・神宮純江 (2006b). 改訂—いきいき度尺度 (Psychological Lively Scale-Revised) (PLS-R) の信頼性と妥当性—性別と年代別の検討—健康支援, **8**(2), 130-141.
- 植村勝彦 (2012). 8章 地域社会の受け入れ: コミュニティ感覚 現代コミュニティ心理学 理論と展開 東京大学出版会 pp. 181-200.
- 山田ゆかり (2006). 大学新入生における大学への適応に関する検討 名古屋文理大学紀要, **6**, 9-36.
- 山口桂子・服部淳子・中村菜穂・山本貴子・小林督子 (2002). 看護師の職場コミュニティ感覚とストレス反応: 看護師用コミュニティ感覚尺度の作成を中心に 愛知県立看護大学紀要, **8**, 17-24.